

<2021年度 第1回定例研究会／オンライン開催>

## 保育士養成における場面記録の活用について

講演：

上原 真幸（熊本学園大学社会福祉学部講師）

日 時：2021年7月5日(月) 18時00分～19時30分

2021年第1回定例研究会では、「保育士養成における場面記録の活用について」というタイトルのもと、本学社会福祉学部講師の上原真幸氏にご講演いただいた。上原氏は2020年4月本学に着任し、保育・児童家庭福祉がご専門の若手研究者である。現在は、子どもや保護者への家庭支援、保育の実践研究を軸に、本学では保育所実習の実習指導を担当されている。今回はZoomを使用したリアルタイムのオンライン研究会とし、30～50代の保育士の方を中心に多く聴講いただいた。

### 1. はじめに ー場面記録とはー

場面記録とは、本学名誉教授の宮里六郎先生が提示されてきた記録様式（資料①）で、1980年に丸尾ふさ氏が作成したものが前身となっている。保育の一場面を切り取って記録するもので、初めて実践記録を書いてみようという人にも取り組みやすく、子どもの動きとともに保育者の働きかけや保育者の思いを記録することができる有用な資料である、記録の意図がはっきりしているものは保育の科学化に役立つと、実際の記録例や映像とともにわかりやすく説明がなされた。

### 2. 保育者養成校における場面記録の活用

上原氏は、この場面記録を保育者養成校で導入し、活用する取り組みを進めている。本学では、保育実習後の授業において実習中に経験した場面を1つ取り上げ、場面記録に記載し、学生同士が相談し合う時間を設けている。実習日誌だけでなく場面記録を用いることで、実習生が具体的に子どもとどのようにかかわったか、その際子どもがどのような反応を示したかなど、そのときの実習生の心の模様がわかるという。また、学生なりに互いの悩みに共感し助言し合ったり、相談に応えようとしたりすることで、相談場面により関心をもち、自分なりの子ども理解の視点や保育方法を探るきっかけとなっていることがうかがえた。

### 3. 「実習時における学生の困難事例の検討 ー乳幼児との対応を中心にー」概要と結果

場面記録の活用は、本学だけでなく他の保育者養成校でも複数導入されている。2019年度には、実習時に学生がどのような場面を誰かに相談したいと思った（＝困難を感じたのか）について調査を

2021年度 第1回熊本学園大学附属社会福祉研究所研究会資料

資料① 宮里六郎・古庄範子 (2006) 『保育に生かす実践記録一書く、話す、深める一』かもか出版、p.46-47.

【場面記録】

日時	1999年4月28日 (水曜日)	その時の 歳月齢	R……2歳3か月 S……2歳4か月	記録者 (美枝智子)	園名 (S園)
子どもの事 家族構成 その他	R 父母、姉、本人 S 父母、兄2人の3人兄弟、末っ子	テーマ	これがいいと		
その子を保 育者はどう とらえてい るか	R、S…自分の意志をしつかりも っており主張する。 友達に手を出すことはなく、相 手からされても泣いても泣いて逃げてい くことが多い	その場面の 状況	戸外遊び中 (登園後)		
	実践過程 (子どもの動き及び自分の動きかけと内容)	他児との かわり	それぞれ好きな遊びをみつめて遊ぶ (ひとり遊び)		
保	登園後、園庭でそれぞれ好きな遊びをみつめて遊んでいた が、突然Rが大声で泣き出した。 みるとRの乗っていた三輪車にSが片足をかけて、無理矢理乗 ろうとしていた。 Sも負けまいとして大声で泣く 【どうしたの】 保育者が寄っていくと、2人共さらに大声を出して泣く。 【三輪車乗りたいとね、でも2人でとりあったら乗られんね】 【どっちがはじめに乗ってこっつ、ただ泣くだけである。 聞いても答えはかえってこず、ただ泣くだけである。 【Rちゃんが乗ったとっつ？】 【うん】と泣きながらも言葉をたてにふっとうなずく。 【ひゃあ、Sちゃんは、とっつらいかんたい】 【じゃあ、イヤと大声で泣きながら、はまりきりと言う。 【Sちゃんも三輪車乗りたいとね】 【うん】と泣きながらもうなずく。 【そうね、Sちゃんも乗りたいかんね、でもRちゃんが乗っ とっつんだけん、取っつらいかんもんね、違う三輪車探そう か】 【ひゃあ】とまた大声で泣きながら言う。 【そうね、これがいいと】 【うん】とうなずく。 【あら困ったね、この三輪車じゃないといかんとなね】 【うん】と言う。	また言葉に出して自分 の気持ち言うことは できないので、他の園 きかたをした方がよか ったのではないかと			
保					
保					
保					
保					
R					
保					
保					
保					
保					
保					
S					

※保育者どうしの会話、動きは( )を使い、その中に記入する。

保 R 保	「じゃあ、Rちゃんが乗ってからSちゃんとかわってあげて」 【イヤ】と首を横にふる。自分の三輪車とばかりにハンドルを 持つ。 【そうね、じゃあRちゃんのうしろにSちゃんを乗せてあげて】 2人共どういふ意味かわからないようすである。 Rは三輪車を取られはしないかと必死でハンドルを握ってい る。 Sを三輪車からおろし、うしろの足のせにSを立てて背もた れをにぎらせる。 【こうしたらどうかね、2人で一緒にいなあ】 そう言いながら少しうしろから押して動かしてやる。動きだ したことで満足したようすで、泣きやみ、笑顔がもどる。しば らく保育者が押してやっていたが他児の受け入れのため離れる。 しかしSを乗せたままでは重すぎてRの力では動かないので、 Sは自分からおろっていく。 Sは自分からおりてくる。Rは自分からおりてSに三輪車を渡 ぐるっと一周回っていき、Rは自分から砂場の方へ行ってしまう。 し、Sが走り去った後、自分から砂場の方へ行ってしまう。	交替する意味をわかっ ていないのではない か。順番や交替でき ずに解決しようとするこ とに問題はないか
保		結局、保育者の一方的 な解決法で事をおさめ てしまったのではない か
		動きかけの評価と分析 2歳児とはいえ月齢が低く、まだ単語の発語のみで、自分の気持ちをうまく表現できないうちの子ども同士のトラブルの場合、保育者の一方的な働きかけだけでは、お互いの気持ちを十分くみとることはできないのではないかと。反省させられることが多い。また交替やゆずりあり意味をわからせるためにも、その前の段階として、自分がどうしたいのか、しっかりとわかっているか、同調してもらうことで本人が納得し、次の行動へとスムーズに移れるよう配慮していくことが必要ではないかと思われる。その点で他にもっといい方法がなかったかどうか、意見を伺いたいと思う。

行い、その概要と結果についても説明がなされた。全体の約6割の学生があそびの場面に対応の困難を感じており、なかでも「構成あそび（製作／ブロック／折り紙等）が最も多く、できる・できないがはっきりと表れやすいあそびに対する実習生の働きかけが上手くいかず悩む状況や、教える側としての役割に悩む場面がみられるということであった。また、課業の場面では園主導の活動が最も多く、実習生自らが行う指導よりも現場の保育者が主導する一斉活動等のなかで困難さ（例：活動に参加しながらない子どもへの対応など）を感じていることが明らかとなった。

#### 4. 場面記録を実習日誌に応用する（可能性の模索）

保育者養成校における場面記録の活用を通して、上原氏は、今後の可能性として実習日誌に応用していくことを模索している。現在の実習日誌様式は、①時系列記録 ② エピソード記録様式 ③ ドキュメンテーション型 ④ 環境図型日誌などがあるが、現時点ではほとんどの養成校が①時系列記録となり、対象者理解よりも保育方法の理解に終始する傾向にあるという。場面記録は、自分が感じた困難場面を文字に起こすことで、保育方法にとらわれる前にその場面の子どもの状況を客観的にとらえ直すきっかけになる可能性があるのではないかと述べられた。

一方で、近年では③ドキュメンテーション型にも注目が集まっている。保育中に心動いた場面の撮影をし、その写真を用いる記録方法となっており、実習生がどのような子どもの姿に着目しているかが実習園にも伝わりやすいとされているが、撮影に集中してしまい子どもとのかかわりがおろそかになってしまうことや、写真データの取り扱いの問題などの課題もある。上原氏はこの点にも言及し、場面記録はそもそも「相談記録」であるため、写真を用いなくても場面記録を行うことで実習生と実習園との対話や実習園からの実習生理解につながるのではないかと、今後は時系列記録と場面記録を上手く併用して、子ども理解や自身の保育方法の省察により一層意識をもたせると有効ではないかと述べられた。

#### 5. おわりに

現行の保育所保育指針（厚生労働省）の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」では、小学校就学時の具体的な姿として10項目が示されており、保育士等は指導を行う際に考慮するものとされている。これは、あくまでも保育者が子どもを多様な姿でとらえ理解してほしいという思いで出された指針であるということ、子ども理解の視点やとらえ方を広げるためには、保育者の自己評価や園全体での評価（振り返り）を行い、ミーティングや研修等を通して多様な視点を養うことが重要であると強調された。

講演終了後は、質疑応答がフリーディスカッション形式で進められ、最後は研究会にご参加くださっていた宮里六郎先生からもお言葉を頂戴した。保育研究の出発点は保育者の悩みのなかにある、保育者養成校においては学生が手立て（の悩み）を相談し合うことで子ども理解が深まると述べられ、今後の場面記録の可能性について期待感をもって話されている姿が印象的であった。オンラインで画面越しのお言葉であったが、会場全体が和やかで温かな雰囲気にもまれたひとときとなった。

研究会終了後のアンケートでは、多くの参加者から多様なご意見・ご感想をいただいた。以下、一

部を抜粋したものをご覧いただき、本研究会が盛会のうちに終了したことを報告する。

- ・ 具体的な数値も踏まえ、学生の困り感を知ることができたのはとてもよかった
- ・ 実習の意義に関する新たな視点を見出すことができてよかった
- ・ 場面記録も使用することが、子どもの理解を深める一つの機会になるのではないか
- ・ 場面記録を実習日誌に利用することはよいと思うが、指導するだけの子ども理解、発達の理解がないといけないのでは
- ・ 学生の負担になることも考えられるので、保育士離れにならないように保育の楽しみや喜びとともに学んでいってほしい
- ・ 今後は児童養護施設や高齢者・障がい者支援等においてもこの手法が導入・活用されていくことが望ましい
- ・ 保育現場と保育者養成校の共通理解があれば、保育実習は大変良い学びの機会になる。本研究会がその架け橋になっていくとよい

(研究会報告者：藤塚千秋)